

ライムの落果防止技術

ライムは新鮮さ・安全性・高品質(果汁多)のため消費ニーズは高いが、国内生産量は非常に少なく、県内各地でもわずかに生産されているにすぎない。ライムはレモンと同様四季咲き性が強いが、タヒチライムは3倍体で種子がないためか結実率が非常に低く、年間の開花数が最も多い春花の最終的な結実率はおおむね3～5%程度である。

結実率を高める決め手はGA剤の処理であるが、処理時期によって効果にバラツキが生ずる。春季の開花は3月から5月にかけてみられるが、効果が最も高いのは、春花開花のピーク終盤となる5月花に対する処理である。処理時期はこれらが落弁し、花柱が脱落する6月上旬が適期であり、100ppmを散布処理すると、収穫期で処理果実の50%以上の着果率を示した(図1)。

成熟期の落果防止には、果実の横径が2～4cmの時期に50ppmと収穫期の11月中旬に20ppmの2回散布を行うと収穫可能期間を約4ヶ月延長する効果が認められた。また、ライムは果皮の緑色がぬげ黄化すると商品性



ライムの結実状態

を失うが、GA剤を処理すると黄化抑制効果も認められた。

ライム栽培では、有機物を十分に施用し、保水力を高め細根の発生を促し、生育期間には充分かん水する必要があるが、成熟期に樹上で尻腐れ状の生理障害が多発する場合がみられる。この対策としては収穫期にやや乾燥ストレスを与えることで障害果の発生を抑制することができる。但し、GA剤は現在のところ農薬としての登録がないため、登録の拡大が必要である。

(岩城分場 主任研究員 中川雅之)

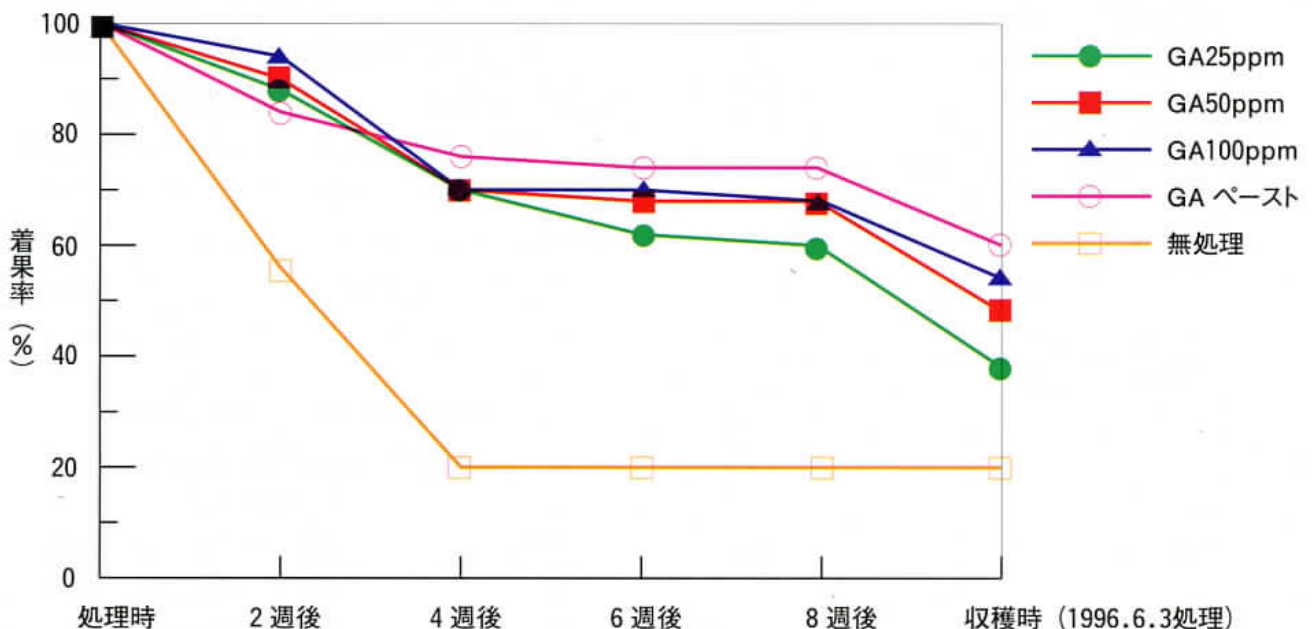


図1 GA処理による着果率の推移